

「地域の想いをかたちに」

1. はじめに(テーマの主旨説明として)

今回のシンポジオンでは、学生の志の育成を念頭においた交流を目的として、学生のプロジェクト活動成果を募り、プロジェクトなどの活動実績を基にしてプレゼンテーションおよび語り合うことにしました。主旨は、社会性のあるプロジェクトに対して、問題点や今後の発展性を軸に語り合い、類似の課題を抱えた地域に対する教育機関や学会としての取組みのあり方を探るためです。

当日は、北陸・東海地区の大学・専門学校から6チームが参加し、来場者とともに熱く語り合いました。ここに報告します。



発表風景



2. 開催概要

日時：9月10日(金) 15:45
—17:30

会場：富山大学五福キャンパス
工学部 210 講義室

話題提供学生：6チーム

参加者 60人

実施タイムテーブル (以降敬称略)

司会：乙川佳奈子、松澤光聡 (富山大学学部生)

15:45-15:50 趣旨説明と実施要領 (by 永野紳一郎)

15:50-16:55 各チームの発表 10分/チーム、計6チーム

16:55-17:25 語りあい(自由討議)

17:25-17:30 各チームまとめ、全体まとめ

話題提供学生チームとテーマ

- 1：福井大学チーム；代表：吉田貴博
題目；越前和紙をつかった七夕吹流し制作
- 2：富山大学チーム；代表：松澤光聡
題目；間伐材を活用した椅子づくり
- 3：名古屋市立大学チーム；代表：畔柳昭佳
題目；子ども達の体験型まち・建築学習の場「だがねランド」
- 4：富山建築・デザイン専門学校チーム；代表：岩瀬慎吾
題目；富山駅北文化ネットワーク
- 5：金沢工業大学チーム；代表：北川萌未
題目；能登町明かりプロジェクト
- 6：新潟大学チーム；代表：小林成光
題目；「里山」の緑とまちをつなぐ地域と大学との協働による三条ポケットパーク

3. 各グループの発表と語り合い

3.1 越前和紙をつかった七夕吹流し制作

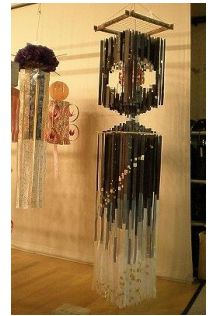
福井大；稲垣裕史、矢倉大地、吉田貴博、池田高康

(1) 発表概要

私たちは越前和紙をつかった七夕吹き流しコンペへの参加をきっかけとし、「風の掛け橋」と題した作品をチームで制作、吹流しがまちづくりにも建築にも発展していくことを実感したので、ここに報告することにした。

吹流し制作コンセプトは、越前和紙の良さ「透き」を活かしつつ、吹流しの「変化」を表現することであり、七夕の織姫彦星の出会いのストーリーを含んでいる。仙台の七夕のように地域や風土を構成するところまで発展できればとの思いもこめた。

吹流しは、越前和紙を使い、(風により)変化にとんだ形態をつくる非常に面白いものである。特に三つのポイントを考えた、第一は不均一性というものであり、大小さまざまな短冊を構成し、風により揺れ動く変化をかもし出す。第二は、粒子性であり、上部の物体としての玉を粒子に分割して、やわらかな変化をつくりだしている。第三には重層性であり、かさなりがかもし出す雰囲気を楽しむものである。こうして、青と赤の粒子がさらさらと動き、二人がうれしさに浸るといったストーリーを描くことができる。



今回取り組んでわかったことは、4人全員の意見を出し合いそれを集約していくことの大変さ、自然素材を使うことの難しさ、原寸で作ることの意味である。こうしたことが建築のものづくりにつながるはずと思っているので今回の経験を今後役に立てていきたい。

(2) 語り合い /他大学のものは大きなプロジェクトを学生が担っているので迫力があつた/福井のものは学生だけでやっていて、自主性ということでは共感できた/自分たちの建築とかけ離れているかもしれないがものづくりとしては共通である/伝統のものを建築に生かし、物の本質をデザインしよしい建築作りをしたい/

3.2 間伐材を活用した椅子づくり

富山大；乙川佳奈子、奥野さつき、松澤光聡

(1) 発表概要

富山大では2年次に椅子づくりの授業がある。私たちは、この授業で環水公園(富山駅



北にある運河を活用した公園)の休憩用につくる地域材使用の椅子づくりにのぞみ、(富山県)氷見の間伐材でつくられた板(2700mm*190mm*30mm)二枚使ってデザインし(実物大で)制作した。

6/10に現場をスケッチし、6/15に人体寸法を調べ、6/17に山に入り林業に実情を知った。その後、図面を描き、模型を作り、1ヶ月かけて制作した。できあがったときは、なんともいえない充実感と感動にひたることができた。

制作の目的は二点ある。第一は、公園にあう椅子のデザインゆえに公園を訪れた方々がわれらの椅子に座ることにより公園そのものが好きになるようにすることである。第二は、間伐材そのものに関心を持っていただくことである。

皆さん、椅子を持ってきましたので、思う存分座って私たちの思いを感じ取ってください。

(2) 語り合い 皆さんの発表は地域に結びついている／自分たちも見習いたい／

3.3 子ども達の体験型まち・建築学習の場「だがねランド」

名古屋市大：畔柳昭佳、小林哲也、遠藤愛、森咲耶子、
神田晃希、森川将成

(1) 発表概要

私たちは子供たちによる体験型まちづくりの場として「だがねランド」に取り組んでいる。「だがね」とは名古屋弁で何々で



すという語尾) 趣旨は、子供たちに「まちや建築」について制作し暮らして、「まちや建築」のよさを体感することにある。

毎年、名古屋都市センターの協力を得て、広い会場を借りて7/20から8/20まで(夏休み1ヶ月間)、参加人数は述べ2600人の規模で実施している。ここに紹介する。

(1)ハードとしてランドの作成：まず、会場内で、道路、建物、公園などの配置を都市計画的に考えた。次に、ワークショップスタイルで建物を(中に入れるスケールで)つくった。設計図を描き模型を作り、銀行、警察、新聞社などをつくった。また学校もつくった。中廊下式で二教室あり、黒板も用意した。材料については、段ボールに加えて、本当の木材もあり、さらに紙コップを積み上げるユニークなものもあった。なお、大工さんも呼んで一緒に施工もした。

(2)ソフトとしてまちでの暮らし：

メインストリートは子供であふれ、大盛況であった。

町長選挙もやり、夏まつりも、またアーキテクチュという資格を制定し、3人が3級を取得した。

(3)コメント：暮らしてみるということは本当の街ではなかなかできないことであるので、こうした体験はじつに貴重と考えている。子供には、ハード・ソフトの両方から学ぶようし、ハードとして都市計画や建築作りを、ソフトとして体験や街の仕組みの理解や街そのものにおける居住体験を狙いとした。もちろん、われわれ大学生・大学院生おおいに勉強となり、企画力・遂行能力が養われたと思っている。

(2) 語り合い /皆さんの発表はいろんな面から考えており、種々の切り口があると感じた／一人ならひとつの方向、多くの方と一緒にあらゆる方向のアプローチが可能である／

3.4 富山駅北文化ネットワーク

富山建築・デザイン専門学校

岩瀬慎吾、石田恵美、金子祐樹、永井隆、前田和麻、松島純也、山口卓也、麻嵩、清瀬広晃、島宏志、高木慶介、高嶋峻、八幡美紀

(1) 概要抜粋

富山駅北地区の特徴を考慮した文化施設を設計した。駅北地区に点在する空地(駐車場など)を敷地とした。街づくりとして、駅北地区全体を計画立案ではなく、ネットワークとしての有機体の計画した。具体的には、美容施設、水族館、鉄道博物館、音楽施設、祭り広場、児童館、歌舞伎施設、休憩所、食堂、スポーツ施設、図書館、である。



(2) 語り合い /みなさんの自由な発想ができるような建築人になりたい／

3.5 能登町明かりプロジェクト

金沢工業大：北川萌未、篠田慶介

(1) 発表概要

先輩たちが2004年より始めた月見光路というあかりプロジェクトは金沢の季節の風物詩として定着しつつある。我らも先輩に続けとして、能登町でもあかりプロジェクトを企画し、1年生から4年生までの8人が5月から準備し実際に運営した内容を報告する。



能登町は自然が豊かで周りが山に囲まれている。地元住民達の参加によるあかりプロジェクトを企画した。テーマは二つある。一つは能都町らしいデザインとは何かを考えること。二つ目は住民参加で実施すること。この2点を私たちは次のように考えた。能都町らしいデザインとは市民に愛着を持っていただくことが一番であり、そうなると思える身近なものがいいとした。次に、住民参加という前提であったので、誰でも簡単に作れるオブジェをデザインすることにした。

具体的には、月一回の会議を持ち、住民とともにワークショップを行い、次のような3種類のデザインを完成させた。

- (1)よさり花：のとキシマツツジをイメージ
- (2)こんぺい燈：星をイメージ
- (3)空あかり：参加者が願い事を書き込めるあかり

よさり花の1つは大きなものにし、中に入って遊べるようにもした。安全性を考慮し、構造体はジオデシックドームを基本とした。

プロジェクトを通じて、誰にでも分かる、誰でも作れるデザインというものの難しさを知った。また、多くの人と関わるこ

とができ、色んなノウハウを身につけることもできた。

(2) 語り合い /人といかにものづくりのプロセスを共有するかが大事/愛着を持ったデザイン、子供が自由に発想できるデザインを考えたい/

3.6 「里山」の緑とまちをつなぐ地域と大学との協働による三条ポケットパーク

新潟大: 小林成光、松岡聖史、秋山祐亮、寺田慎二、横山大樹、神田結衣

(1) 発表概要

新潟大学では、地域と大学の連携として小さな公園（ポケットパーク）づくりを授業の一環で行っている。具体的には、「里山のみどりを街の中へ」をテーマとして、三条市のJR弥彦線高架脇にある11箇所の空地进行、年1箇所ずつ小さな里山の公園として作り整備していく活動を行っている。

ここでは2009年度の活動を紹介します。

5月：新潟大学大学院一年生13人が参加し、学生3・4人と住民7・8人とでチームを組み、全4チームで町のことを知るために周囲を歩いた。

6月：里山しらすぎ森林公園の山の中を歩き、植栽を調査し山の雰囲気を感じ、デザインのコンセプトを考えました。その後、建設業協会や園芸組合などからもアイデアをいただき、デザインを練り上げ案を作成しました。こうしてできた4つの案を沿線地域の住民による投票と実行委員会による検討でひとつの案に絞り込んだ。

9月～11月：実施案を検討。とくに里山の特徴をいかした植栽計画や地盤の排水などを検討した。里山での樹木掘り出しと仮植え、土の入れ替え、暗渠や園路路盤の敷設などを行った。

2月～3月：土留めとなる縁石タイトルの作成と設置、舗装材（まさ土）の敷設、植樹をおこない、4月に竣工した。

本事業の特徴は、さまざまな組織や人による協働、特に大学と住民の協働である。もちろん子どもも多く参加し、案を考えるとところから参加していけるようにしたことも特徴である。



(2) 語り合い /皆さんの発表は実社会への提案だけに種々の手順やかかわりがおもしろかった/実社会でのものづくりにはその場所をどう読みとって考えるのが難しいと感じた/

4. 参加者のコメント

岩瀬慎吾（富山建築・デザイン専門学校学生）

みなさんの作品は、伝統として引き継いだもの、地域のために実行されたもの、町の一角に展示されるものとどれも形となる素晴らしい作品や活動ばかりでした。中には現地で見えたものもあり、その素晴らしさを改めて実感したものもありました。

自分たちの作品については、全ては伝えられませんが、多くの方々に発表できるいい機会でした。大学生の方々の発表

を聞くことができただけでも参加した価値はあったと思います。

乙川佳奈子氏（富山大学生）

普段、他大学の建築学生と関わる機会がないため、他大学の活動の様子を知ることができとても新鮮でした。

今回の参加チームは大学院生が多かったということもあり、地域と密着した規模の大きい活動をしていてとても楽しそうだなと感じました。特に、名古屋市立大の「だがねランド」は、子供たちの設計した家を建てるというプロジェクトなのですが、このように楽しく建築に触れることができる環境を子供たちに提供するという事は、建築に興味を持つ子供が増えることに繋がり、日本の建築の将来がおもしろくなっていくことに繋がるのではないかと感じました。このような活動は日本全国に広がってほしいと思います。

小林成光（新潟大学大学院生）

他大学の方の発表を聞きながら、このシンポジオンでの発表が僕らも含めて「いわゆる建築」とは少し違っていることに気づきました。仮設型まちづくりやインスタレーション、プロダクト制作に近いもの、そして僕らは公園づくり。建物を建てるという選択肢以外のまちづくり活動が多く見受けられました。これらは、実際に作ったり、運営することが伴う活動でもありました。自分たちの手で仮想のものから、実際のものへの変換はなかなか体験できるものではなくて、仮想と実際のギャップを埋めることは貴重な体験となったはずで。それが、発表時に発表者の方から自信という印象を与えてくれたのだと思います。発表後のディスカッションの時間があまりなく、討議の集いにも参加できなかったために、それぞれの体験についての語り合いの場を持てなかったことがとても残念でした。しかし、自分たちとは違った形での活動について知ることとはとても良い刺激となり、また自分たちの活動を見直す機会ともなりました。

畔柳昭佳（名古屋市立大学大学院生）

富山でだがね旋風を巻き起こそうと息巻いてプレゼンに臨んだ甲斐もあり、だがねランドについての魅力を存分に伝えることができたと思います。

とくに、その後の自由討議の時間や懇親会の場を設けていただいていたことによって、事例発表だけではつかめない、だがねランドに対するダイレクトな反応を得られたのが、私達にとっても大きな収穫だったと思います。

また、福井大学桜井研究室の方々や富山大学の学生と交流をはかることができたのも素晴らしい体験でした。事例の発表も大切ですが、発表後の自由討議の時間やさらにその後の懇親会によって生まれる学生同士のつながりにこそ、こういったシンポジオンの醍醐味があるのだと再認識しました。個人的には、わかりやすい発表だったと様々な方から評価していただいたことが大きな自信となりました。振り返ってみると、小学生にもわかるように幾度となく噛み砕いてだがねランドについて説明をしてきたことが、人にわかりやすく物事を伝える訓練になっていたのだと思います。また、子ども達の興味を引きつけよう

と必死に説明を繰り返す中で、だがねランドの面白さをいきいきと魅力的に伝える能力も磨かれていったのだと思います。

「わかりやすく伝えること」「魅力的に伝えること」これら2点の能力を鍛えられるのが、子どもを対象にしたワークショップを大学生が行うことの良さだと思います。

松澤光聡（富山大学学生）

今回のテーマである地域との関わり方についても、大学ごとにそれぞれ違った関わり方があり、とても興味深かったです。また、皆さんの研究・活動に対する熱意や、地域と積極的に関わろうとされている姿勢に、とても刺激を受けました。

自分にとって、あのような場で発表する機会をいただいたことは、とても良い経験となりました。大学の中だけではわからない自分たちの姿について、他大学の皆さんとの交流や意見交換などを通して、客観的に感じる事ができたからです。具体的には、説明やプレゼンの未熟さ、活動に対する考えの足りなさなどについて、気づかされました。さらに、自分たちの活動について質問を頂き、それについて答えることで、自分たちのやってきた活動の意味や価値について、改めて考える良い機会にもなりました。

発表の場も有意義でしたが、それ以上に、私が有意義だと感じたのは懇親会の場です。食事やお酒、皿回しなどのレクリエーションを楽しみながらの交流は、とても楽しく有意義なものでした。和やかな場で、各々の研究や活動に関する話はもちろんのこと、研究室の雰囲気や、研究室に入った経緯、学部生時代の話など様々な興味深いお話を、たくさん聞かせていただくことができました。

池田高康、吉田貴博、稲垣裕史、矢倉大地（福井大学大学院生）

吹き流し制作を通してチームで考えをまとめて一つのものをつくっていくことの難しさと楽しさを体験することができました。建築の場合に置き換えてみても、考えをまとめ、形を与えるしていくことは一人でできるものではありません。今回これらの活動を公の場で発表させていただける機会を得たことは、「制作」という活動のひとつのくぎりになったと思います。地域に根ざした文化を捉え、自分たちの考えを繁栄し形として表したのを、多くの方々知ってもらえる場を与えていただけたことで、自分たちの成長につながったと思います。（by 稲垣）

発表の場を設けていただいたおかげで自分の中でもやもやした、まとまらなかったものがたちとなって発表することができました。（by 矢倉）

シンポジオンでの発表は、自身の作品や考えを多くの方々へ伝えるだけでなく、自身の作品に対する意見や感想を聞けたという点でとても有意義なものでした。また他大学の発表を聞いたことやその後の交流会も良い刺激となりました。（by 吉田）

他大学での活動が自分の学校でのそれと違うことが新鮮であり羨ましく思えました。（by 池田）

北川萌未、篠田慶介（金沢工業大学生）

初めて学会というものに参加するので、会場に着くまではす

ごく緊張していました。でも、発表の準備をするうちに、各チームの展示場所に模型、ポスター、家具など色んな作品が賑やかに飾られていき、次第に緊張もほぐれていきました。各チームの発表が始まり、皆さんがそれぞれ自分達の活動を思い思いに一所懸命伝えようとしている姿が印象的でした。様々な学年の人達が全く違う内容の活動についてやりがいを持って取り組んでいて、建築という分野が本当に幅広いことをあらためて実感しました。先生からは「自分達の活動をアピールして、他の大学の人達と交流し、刺激をもらえばいいんだよ」と聞かされていたのですが、確かにその通りでした。皆さんそれぞれ発表内容が個性的だったのです・・・中略・・・

最後の交流タイムでは他のチームの人達が自分たちの展示を見に来てくれて、質問したり、感心してくれたりしたのがすごく嬉しかったです。月見光路プロジェクトをやっていて良かったなと思った瞬間でした。

栗原知子氏（福井大教員）

名古屋市立大の「だがねランド」の発表をされていた方たちとお話することができました。名古屋市立大の皆さんは、自分たちが「楽しんで」事業に参加していることや、そのことに「誇り」を持って挑んでいることを一生懸命話してくださいました。「だがねランド」は、ドイツ・ミュンヘンで行われている「ミニミュンヘン（子どもが主体的に子どもだけの街をつくって、遊びを通して社会性を学ぶイベント）」を手本にした、子どものためのイベントです。学生の皆さんは、子どもたちが作るお店や家の制作補助などをされたそうです。

福井大学の発表は、こじんまりとした小さなコンペへの挑戦について発表をされていました。彼らは「他大学に比べ、僕たちの発表の内容は小規模なものでした」と話していましたが、自分たちで挑戦対象を発見し、挑む姿にとても感心し「学生っていいなあ」「若いっていいなあ」と改めて感じる機会となりました・・・後略・・・

5. おわりに

6つの学校の方々、精力的な発表、ありがとうございました。また活発な議論、ありがとうございました。今回の貴重な出会いや体験を今後に向けて励みにしていただければと思います。

<編集：永野紳一郎（金沢工業大学）/

富樫豊（富山建築・デザイン専門学校）>